

情報技術の匠

PROFESSIONAL
第52回
コラボレーションの匠

変化できる、という強さ。

最近、ピアノを始めた。正確に言えば再開。小学校のとき、練習し続けなければいけないことを自分の中で消化しきれずに一度辞めた。だが、今になって続けておけばよかったという気持ちが強くなったという。

「忙しい毎日の中で負担になる部分はありますが、やっぱり好きなことを好きなようにやっている時間はかけがえのないものです。やらないで後悔するより、やって後悔することの方が私らしいかな、とも思います」



やらないで後悔するより、やって後悔した方がいい。それが行木のスタイルであり、プレッシャーのかか

る場面での決断で、後押しをしてくれる魔法の言葉。

「失敗だと思っても、それが次の成功に結び付くことがあると思うんです。エバンジェリストとして活動を始めたころも分からないことはたくさんありましたけれど、やはりやってよかったと思います」

エバンジェリストとしての役割と、現職のITスペシャリストとしての役割との一番大きな違いは、その対象となる相手だ。

「普段の仕事では、特定のお客様に対して最適な方法でコミュニケーションをとる。エバンジェリストは不特定多数、たくさんの方に伝える。この違いに対応するのはやはり

大変でした」

講演で行木の話聞いてくださる人たちは、専門分野も違えば、ソーシャルウェアに対する知識もさまざま。入門編として勉強に来られた方もいれば、ビジネス・チャンスを狙っている企業担当者もいる。そんな中で主題を決め、誰もが納得して帰れるような話をしていくことは、経験のない行木にとっては苦行だったのではないかと。

「始めたばかりのころ、技術論は普通に話せていたと思いますが、オーディエンスに合わせて話を切り替えることは難かったです。それに同じ内容の話をして、反応がいい時と悪い時があります。セミナーに参加いただいたさまざまなバックグラウンドを持つ皆さまに、私の話す内容を理解し納得してもらえるかは課題でした」

エバンジェリストとして、言葉で伝えようと頑張れば頑張るほど、空回りすることもある。だから発想の転換。技術者としての日々の活動の中で、現場で生み出される技術とかかわり続けること。それが自分の言葉に重みと真実と自信を込めていく。

どうしても行木はこのエリアを伝えなかったのだ。

「もともとは技術屋ですので、人前で話すよりも自分で手を動かして



行木 陽子 (なめき ようこ)

日本アイ・ビー・エム株式会社
ソフトウェア事業
Lotus 事業部
ICP シニア・コンサルティング
IT スペシャリスト
ソーシャルウェア・エバンジェリスト

【プロフィール】

製造業のお客様を担当するアカウント SE として、日本 IBM のエンジニアとしての歩みを開始。その後、サービス部門を経て、2001 年にソフトウェア事業に異動後は一貫してコラボレーション・エリアを担当し、現在はソーシャルウェア・エバンジェリストとして、次世代コラボレーションを実現する最新テクノロジーの啓蒙活動ならびに技術支援を行っている。

実験する方が好きでした。それに人前で話さないで済むならその方がいい (笑)。でも、私はソーシャルウェアというエリアが重要だと信じています。それならば、専門に取り組んでいる自分がエバンジェリストとして伝えていくべきだと思ったのです」

現在ソフトウェア事業にエバンジェリストは6名。それぞれが専門分野を持って活動している。この6名はいわばそのエリアを代表し、テクノロジーを世の中に訴え掛けていく使命を担っている。行木がソーシャルウェアの重要性を高らかに宣言し、その責を自ら背負わなければ、もしかしたら誰にも届かないかもしれない。危機感と使命感も自分を動かす力なのだろう。

ここにもやらずに後悔するよりもやって後悔するという行木のスピリッツはあった。



それほどまでに情熱を燃やすソーシャルウェアとはそもそもどんなものなのだろうか。

「簡単に言えば、ご存知のようなツイッター、Facebook、mixiをはじめとするソーシャル・メディアの技術や仕組みを企業のコラボレーションへ適用するという発想です。しかしながら、このようなテクノロジーを企業で活用するためには、セキュリティや安定性など考慮すべき点が多々あります。そこで企業向けに最適化されたものをソーシャルウェアと位置付けています。『このようなツールは、ビジネスには使えないのでは?』という考える方も多いかもしれませんが、実際はとても有益で、企業で

必要となる新しいアイデアや発想を生み出す可能性を持っています」

例えば行木が手掛ける『Lotus Connections』のようなソーシャルウェアを導入することで、結果だけではなくプロセスが共有できる。

提案書や仕様書などを共有する際に、「整理された完成文書」としてだけではなく、途中段階の思い付きや意見、疑問点など文書化されるまでの経緯を気軽に共有することができる。情報は最初の段階では必然的にまとまりがないものになるが、その分より多くの知見に触れることができる。

「グローバル企業なら寝る前にアイデアや思い付きを投げ掛けておくと、時差の関係もあって朝になればそれに対する意見や情報がタイムラインにズラリと並ぶこともあります。全部を見る必要はありません。そこから何を選ぶのか、考えるのは見る人が判断すればいいんです」

ソーシャルウェアが企業コラボレーションの在り方を変革するかもしれない。その確信は現場ではなく意外なところで生まれた。

「ドジな話なんですけど、土手を歩いていて滑り落ちてしまって足を複雑骨折し、しばらく自宅で仕事をすることがありました。この時、対面で会うことのできない同僚とのコミュニケーションに威力を発揮したのがソーシャルウェアです。『時間や距離を越えることができるな』とこの時実感しました」

病院のベッドでも、アイデアを思い付いたら何か行動しなければ気が済まない。

「結局、やっちゃう (笑)。『休ん

でいなさい』って言われるんですけども…。同じ病院にいてリハビリ頑張っている方々を見ると『わたしも頑張らなきゃ!』って思ってしまうんですね」

行木が仕事のブランクを生かしたのはこればかりではない。

「出産、そして育児。自分と家族にとってはとても幸せなこと。その一方でどうしても女性としてキャリアを積んでいくためにはブランクになってしまう恐怖感があったんです。でも切り替えました。1年の余裕をもらったんだ、それならその間に普段できないことができるんじゃないかと。要は受け取る側の気持ち次第。気持ちの切り替えが重要なんです」

その時の息子さんも高校生。

「最近はお母さん忙しくて大変だね。でもそれがカッコイイ」なんて言ってくれます」

人生に変化は付きもの。そこでどう選択できるか。講演で行木はダーウィンの言葉を使ってメッセージを送る。

「本当に生き残れるのは強い人でも賢い人でもない、変わっていける人なのです」

人間も企業もツールも変化していくことで新しいものが生まれ、生き残っていく。でも変わっていくことばかりが素晴らしいのではない。

「変化することを恐れない、という気持ちを持つことが大切。そうすれば本当に変化すべき時に迷いなく変わることができますから」

後悔しないで前へ進もう。その気持ちを持ち続けていること。だから行木は、仕事と人生をどんどん楽しくしていける。